

News Letter

No. **10** March 2007

21st Century COE Program
Center for Evolutionary Cognitive Sciences at The University of Tokyo

プログラム4年目の報告 — 最終年度に向けて



長谷川 寿一
(拠点リーダー)

平成15年(2003年)度にスタートした本プログラムは、人間生物学、認知科学、言語科学の分野の研究について、進化的視点をふまえて領域横断的に取り組み、新しい人間統合科学の構築を目指している。4年目も年度末を迎え、研究ステージで言えば収穫期に入った。事業推進担当者、プログラム協力教員、特任研究員(PD)、研究支援員(RA)が、それぞれのプロジェクトで過去4年間の蓄積を結実させるべく研究に取り組んでいる。

平成18年(2006年)度の本COEの組織体制の概要をご報告すると、事業推進担当者22名、プログラム協力教員4名、特任研究員17名、研究支援員22名である。この体制は、前年度と比べてほとんど変わらないが、昨年度の特任研究員のうち3名が他の研究機関に新しい研究ポスト(大学教員2名、研究機関研究員1名)を得た。本年度の予算は1億2000万円余で、これも前年とほぼ同じであり、予算の約43%が、人経費として特任研究員、支援員の若手研究支援費として使われている。32の公募型プロジェクトが、東京大学総合文化研究科を中心に、理学系研究科、農学生命科学研究科、人文社会系研究科、総合研究博物館に分かれて行われている。

2006年の大きなイベントとしては、まず3月に“Social Cognition: Evolution, Development, and Mechanism”、6月に“Physical and Psychological Reasoning in Infancy”(乳幼児の推論能力)、そして7月に“Human Sentence Processing and Production”(文処理と文生成)という3つの国際ワークショップを主催した。いずれも150名規模の集会であるが、若手研究者が中心となって企画運営にあたる催しであった。また、2006年に本COEメンバーが実行委員長を務めた国際学会としては、3月に第16回意味論・言語理論学会(Semantics and Linguistic Theory)と、9月に第4回国際構文理論学会(The Fourth International Conference on Construction Grammar)があり、それぞれ海外から多くの参加者を迎えた。その他、日本進化学会(動物の社会性)、日本動物行動学会(性的対立)、日本心理学会(心の進化)等の各学会大会で国際シンポジウムを企画した。これらのイベントについてはニューズレターで随時報告を行ってきた。

収穫期にあたり、若手研究者が国内外の学会で研究成果を発表することを奨励し、支援する体制も整った。さらに次世代の研究者を誘う上で、学部学生向けの教育プログラムも開講し、のべ約250名が受講した。普段の授業では聞くことのできない先端研究や、英語による講義など、受講者からは刺激的な内容であったとの感想が多く寄せられている。

2008年には進化認知科学の中核的な国際学会であるHuman Behavior and Evolution Society Meetingを日本に招聘することも決定した(2008年6月)。本プログラムの歩みに合せて、日本国内においても人間精神を進化的に理解することの意義が浸透し、研究者の層が広がると共に、研究水準も著しく向上したように思われる。国際学会を迎える母体として、2007年中に人間行動進化学会を設立するべく準備を進めている。これもまた本プログラムの大きな結実の一つとなるものと期待できる。

Contents

プログラム4年目の報告 — 最終年度に向けて	1
新しい研究動向 — こんな研究をはじめました!	2-3
本プログラムの教育活動	4
若手研究発表支援 — 海外発表を終えて	5
研究成果紹介 — プロジェクトベースの報告	6
活動報告(2006年10月~2007年2月)	7-8

新しい研究動向—こん

日本語のかき混ぜ文はどのように処理されているか？

小林 由紀

人間は言語をどのように処理するのか。また、人間の言語処理と他の認知処理にはどのような関係があるのか。これまで英語やドイツ語を中心に言語処理についての研究が数多く行われてきたが、最近では日本語を用いた研究が増え、「人間が持っている普遍的な言語の性質」についての貴重な知見をもたらしている。

日本語は英語よりも語順が比較的自由な言語である。例えば、次の4つの文を比較してみよう。

- (1) 太郎は 花子に プレゼントを あげた。
- (2) 花子に 太郎は プレゼントを あげた。
- (3) 医者は 患者が 点滴を 受けたと 述べた。
- (4) 点滴を 医者は 患者が 受けたと 述べた。

(1)と(2)の文は語順は違っているが、意味は同じであることはすぐわかる。しかしながら、いくつかの研究では(2)の方が(1)よりも理解が困難であることが示されている。また、埋め込み文である(3)と埋め込み節の目的語を先頭に出した文である(4)を比較すると、後者の方が難しい。同じ内容を表す文でも、語順によって理解のしやすさが違ってくる。このような現象をかき混ぜ現象(scrambling effect)という。また、(1)、(3)のような基本的な語順の文(canonical sentence)とは語順が異なる文のことをかき混ぜ文(scrambled sentence)という。かき混ぜ現象からわかることは、比較的語順が自由である日本語においても基本的な語順が存在すること、日本語も階層構造をなしていることである。

かき混ぜ文においては、ファイラー・ギャップの処理が必要であるとされている。例えば(2)の文の「花子に」は本来の語順では文の先頭に来ない。このような句がファイラーとなり、本来あるべき位置(ギャップ)まで保持される。そして、本来の位置において読解時間が長くなることが示されている。

今回私が行った研究では、文の内容のもっともらしさが、埋め込み文のかき混ぜの処理にどのように影響するかを検討した。かき混ぜ文の処理において、もっともらしさのような意味的情報がどのように影響するのか。

9つの句からなる埋め込みを持つ基本語順文、またはかき混ぜ文を句ごとに被験者に呈示し、各句の読解時間を計測した。かき混ぜ文は、埋め込み節の中にある目的語を先頭に出すことによって作成した。また、意味のもっともらしさは、主節と埋め込み節の主語を入れ替えることで操作した(表1参照)。

表1: 実験で用いた刺激文の例(数字は領域)

もっともらしさ高・基本語順文:								
医者は	手術が	成功した	翌日に	患者が	いやいや	点滴を	受けたと	述べた
1	2	3	4	5	6	7	8	9
もっともらしさ低・基本語順文:								
患者は	手術が	成功した	翌日に	医者が	いやいや	点滴を	受けたと	述べた
1	2	3	4	5	6	7	8	9
もっともらしさ高・かき混ぜ文:								
点滴を	医者は	手術が	成功した	翌日に	患者が	いやいや	受けたと	述べた
1	2	3	4	5	6	7	8	9
もっともらしさ低・かき混ぜ文:								
点滴を	患者は	手術が	成功した	翌日に	医者が	いやいや	受けたと	述べた
1	2	3	4	5	6	7	8	9

その結果、かき混ぜ文においては、先頭の句の本来の位置が判明する第8句の読解時間が基本語順文よりも長くなることが示された(図1, 2)。第8句において

ギャップの処理が行われるために読解時間が長くなったと考えられる。更に、基本語順文においては意味のもっともらしさが低い文の方が高い文よりも第8句、第9句において読解時間が長くなるが(図1)、かき混ぜ文においてはもっともらしさによって読解時間に差が見られないことが示された(図2)。また、文を読んだ後に文の内容についての質問を行っているが、かき混ぜ文の方が基本語順文よりも、もっともらしさが低い文の方が高い文よりも誤答率が高くなった。

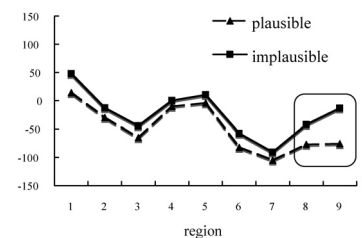


図1. 基本語順文におけるそれぞれの句の平均読解時間(ms)。第8句と第9句において、もっともらしさが低い文の方が高い文よりも読解時間が長くなっている。

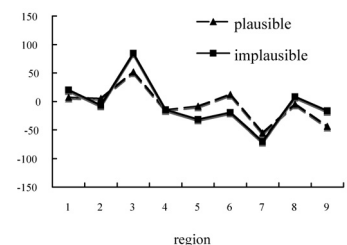


図2. かき混ぜ文におけるそれぞれの句の平均読解時間(ms)。第8句と第9句において、もっともらしさが低い文の方と高い文とで読解時間に差が見られない。また、第8句の読解時間が基本語順文よりも長くなっている。

興味深いのは、かき混ぜ文においては、もっともらしさによる読解時間の差がなくなってしまうことである。かき混ぜ文においてはファイラーをギャップの位置まで保持しなくてはならないが、その負荷が高すぎて意味的処理まで行えないのかもしれない。各被験者のワーキングメモリの容量(各人の処理資源の量のようなもの。この容量が大きい人の方がさまざまな認知的課題の処理の成績が良い)を測定しているが、この容量が大きい被験者は、もっともらしさの効果が見られなかった。つまり、基本語順文においてもかき混ぜ文においても、もっともらしさが高い条件と低い条件とでは読解時間に差が見られなかった。しかし、ワーキングメモリ容量が小さい被験者は基本語順文において、もっともらしさが低い条件は高い条件よりも読解時間が非常に長くなったが、かき混ぜ文においてはもっともらしさによる差が見られなかった。この結果からもファイラー・ギャップの処理の負荷が意味的処理に影響していることが考えられる。

今後は、読解時間だけでなくERPも用いてかき混ぜ文の処理メカニズムの性質を検討していく予定である。かき混ぜ文のみならず、統語処理一般のモデルの解明につながるような研究をしていきたいと考えている。

な研究をはじめました!

動いているものを鮮やかに見る

久保寺 俊朗

シャッタースピードの遅いカメラで写真を撮ると、動いている物体の像はどうしてもぼけてしまいます。このような動きに基づく画像のぼけをモーションブラー (motion blur) と呼びます。そこで、写真の世界では、このモーションブラーをいかに抑えてクリアな画像を得るかが技術上の大きな問題でした。カメラの場合には、シャッタースピードを極力短くすることでモーションブラーによる画質の低下を抑えることを実現してきました。

このような問題は、わたしたちがものを見る場合にも同じように生じます。わたしたちは、眼を通して網膜に投影された像を脳で処理することで、鮮やかな視覚を獲得しています。ところが、困ったことに、わたしたちの眼球にはカメラのように1/1000秒間だけ開いたり閉じたりするシャッターはありません。大雑把に言って、わたしたちの視覚系は、150ミリ秒程度の「長い」間、網膜に投影された情報を足し合わせていることがわかっています。150ミリ秒と言うと直感的には非常に短い時間のように思われますが、実際には致命的なモーションブラーが生じることになります。例えば、わたしたちが歩く速度は、通常、時速4kmと言われています。すると、150ミリ秒の間に、目の前を歩いている人は20cm弱移動することになり、その分、網膜像はぶれることとなります。世の中にはもっと速い速度で動いているものがあることを考えると、わたしたちの運動対象の知覚はかなりぼけたものになるはずで

ところが、動いている物体はそれほどぼけているようには見えません。実際に、街を行き交う自動車や人々が大きくぶれて見えることはないはずで

す。したがって、わたしたちがものを見ている仕組みには、モーションブラーを抑えて、動いている物体の鮮明な知覚を生み出すための仕掛けがあるはずで

まず、眼を動かして動いている対象を追跡することが考えられます。しかしながら、この方法では問題の根本的な解決にはなりません。確かに、対象を追跡するとその対象のモーションブラーはなくなりますが、今度は逆に対象以外の背景がぶれてしまうからです。したがって、動いている対象をクリアに見るための仕掛けは、網膜像を処理している脳の中にあるはずで

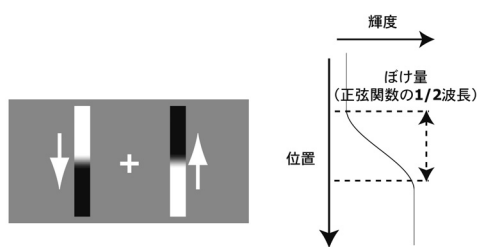


図1. 左:刺激例。右:刺激の輝度プロファイル。

つのエッジ刺激を画面の右側と左側とに提示しました。個々のエッジ刺激は、画面の明るさを変えることで定義します。この時、明るさが変化する幅を調節することでエッジ刺激の物理的なぼけを定量的に操作することが可能になります。例えば、この幅がない場合は明るさがステップ関数状に変化するため鮮明なエッジ刺激となります。一方、この幅が大きくなればなるほど、明るさが滑らかに変化するため、エッジ刺激はどんどんぼけていきます。

まず、このエッジ刺激のぼけが、運動速度に応じてどのように変化するかを測定しました。その為に、被験者に動いているエッジと止まっているエッジとを連続して提示し、それぞれのエッジのぼけを比較してもらいました。この時、止まっているエッジの物理的なぼけを一定にして、動いているエッジの物理的なぼけを止まっているエッジと同じ程度にぼけて見えるように、被験者の反応に応じて調整しました。すると、止まっているエッジと同じようにぼけて見えるためには動いているエッジを止まっているエッジよりもぼかす必要があることがわかりました(図2)。すなわち、もともとある程度ぼけている刺激は動くことでモーションブラーが生じるどころか、むしろ運動によって鮮明に見えることが明らかになりました。

知覚的ぼけ



必要となる物理的ぼけ



遅 ← 速度 → 速

図2. 上:知覚されるぼけ。下:上段に示したように見えるために必要となる物理的ぼけ。同じように見えるためには、提示するエッジを速度に応じてよりぼかす必要がある。

モーションブラーを抑え、より鮮明な印象が生じることは、今回の実験で使用したような単純な映像でも確認することができました。このことから鮮明化は、記憶や学習といった高次の知覚認知メカニズムによるものではなく、視覚系の初期段階にあるメカニズムによるものと考えられます。さらに、動画の鮮やかさやぼけに関する課題に対する成績は、このような補正後の神経表象に基づいて行われていることを示唆する実験結果も得られてきました。

テレビなどに流れるテロップの字をぼかすと、はっきりした字よりも読みやすくなるといった面白い現象もあります。これは視覚系の特性をうまく利用した応用例といえます。今後も、このような現象を定量的に説明できるメカニズムの解明に取り組んでいきたいと考えています。

本プログラムの教育活動

1. 大学院「進化認知科学」および「言語情報科学特別講義I」

2006年10月2日～10月4日の3日間にかけて、広域科学専攻「進化認知科学」および言語情報科学専攻「言語情報科学特別講義I」を通して、本COEのメンバーによる大学院向けリレー講義が開講された。初日は「動物の音声・人間の音声」を共通テーマに、角恵理講師による生物音響学、および川島尊之講師による人間の声の特徴とその知覚、という内容で演習を交えながらの授業が行われた。2日目は、脳波による脳機能測定について、小林由紀講師による講義および、午後いっぱい使った実際の脳波計測実習という内容。最終日3日目は、「人間の言語音声とその規則性」という共通のテーマのもと、田中伸一講師による言語音の法則性とその計算理論についての講義、そして矢田部修一講師による自然言語におけるイントネーションと意味計算の関係についての講義で締めくくられた。こういったリレー講義においては、毎回の授業ごとに異なったテーマ設定で、その間の関連が見えにくいという声もたしかに聞かれるが、今回は1日毎の担当者同士がある程度内容の連携を意識しつつ、従来通り多様性を生かした企画になるようにとつとめた。広域科学・言語情報科学はもちろんそれ以外の専攻からも含め計約20名の受講者があり、講義だけではなく多様な実習も含めた授業をとおして、お互いの関連分野について興味が深まったのではないかと思う。(詳細はこちら <http://ecs.c.u-tokyo.ac.jp/education/education.html#shuchu>)

2. 前期課程 テーマ講義「心の起源に挑む:進化認知科学からのアプローチ」

駒場の教養学部の1・2年生に向けて、本COEの成果を発信するために、毎年入門授業をおこなっている。2006年は3回目のテーマ講義を開講した。113名の学生が聴講し、1313教室は毎回満員となった。講師と講義タイトルは以下の通りである。

10月11日	長谷川寿一「心の起源に挑む:進化認知科学からのアプローチ」
10月18日	渡辺茂(慶應義塾大学)「脳の進化:ヒト型脳とハト型脳」
10月25日	繁樹算男「遺伝と環境の影響の程度を評価する:行動遺伝学」
11月 8日	佐藤隆夫「視覚を媒介としたコミュニケーション」
11月15日	村上郁也「微小眼球運動はなぜ起こるのか:ヒトや動物の視覚認知」
11月22日	長谷川寿一「ヒトは、どこがユニークなチンパンジーか」
11月29日	吉川泰弘「脳とこころ:動物とヒト」
12月 6日	諏訪元「初期人類化石の性差から社会・行動特性をさぐる」
12月13日	石田貴文「霊長類の社会、性、遺伝子」
12月20日	入来篤史(理化学研究所)「知性の神経生物学」
1月10日	板倉昭二(京都大学)「自己の起源—比較認知的アプローチ」
1月17日	丹野義彦「なぜ不適応はなくなるのか:精神病理の二面性」

3. 後期課程 「生命・認知科学特論XV」「言語情報科学特殊講義II」「心理学特殊講義」

上のテーマ講義と同じ曜日に「進化認知科学連続セミナー2006」を開講した。毎回約110名の受講者が参加し、聴講者から熱心な質問が出て、熱気のある講義となった。講師と講義タイトルは以下の通りである。

10月11日	長谷川寿一「心の起源に挑む:進化認知科学からのアプローチ」
10月18日	渡辺茂(慶應義塾大学)「脳の進化:ヒト型脳とハト型脳」
10月25日	David Spragg(農業環境技術研究所)「サル的一生・ヒトの一生」
11月 8日	長谷川寿一「ヒトは、どこがユニークなチンパンジーか」
11月15日	Damien Caillaud(モンペリエ大学)「ゴリラ社会からヒトの原初社会を考察する」
11月22日	船曳建夫・上野有理「『食』の起源と発達—サル、乳児、幼児」
11月29日	吉川泰弘「脳とこころ:動物とヒト」
12月 6日	諏訪元「初期人類化石の性差から社会・行動特性をさぐる」
12月13日	石田貴文「霊長類の社会、性、遺伝子」
12月20日	入来篤史(理化学研究所)「知性の神経生物学」
1月10日	板倉昭二(京都大学)「自己の起源—比較認知的アプローチ」
1月17日	丹野義彦「なぜ不適応はなくなるのか:精神病理の二面性」

若手研究発表支援

海外発表を終えて

第9回 手話言語理論研究国際会議報告

ラマール研究室 佐伯 敦也 (総合文化研究科・博士課程1年)

2006年12月6日から9日にかけてブラジル、フロリアノポリスで開催された、第9回手話言語理論研究国際会議 (Theoretical Issues in Sign Language Research 9) に参加した。この会議は手話研究については最大規模のものであるが、総数約100の発表と500人の参加があった。手話関係の研究大会では情報保障がなされるのが常なのであるが、この点で非常に特徴的であった。例えば口頭発表が音声英語でなされる場合、最大5種の言語へ同時通訳された。内訳は音声ポルトガル語、アメリカ手話、ブラジル手話、イギリス手話、そして確認できなかったがもう一種の手話であった。

私はポスター発表の機会を得て、日本手話における語彙的アスペクトをテーマに参加者と話すことができた。日本手話においては動的現象のアスペクト性が語の内部運動となって現れる。線形で継続的な性質は複数回の軌跡運動へ、点的で瞬間的な性質は一回のみの運動へ反映される。しかしこうしたアスペクト的意味の形式に対する反映は語彙化された表現に制限され、クラシファイアと呼ばれる領域では運動が別の意味を担うことを指摘した。参加者と議論する中で、アスペクト性が運動形式へ反映することは概ね理解された。またアメリカ手話やブラジル手話でも同種の現象が見られることが分かり、今後の研究の一つの可能性が感じとられた。

今回改めて思ったのは、英語で発信することの重要性であった。内容もさることながら英語でいかに発表できるかにより関心の持たれ方が随分異なる。この点も踏まえ、2010年第10回は準備をしていきたい。



発表者に向かって右側。ブラジル手話通訳がスクリーンへ映し出されている。また発表者のいる壇上(左側)でも2種の通訳がなされている。



学会のロゴマーク

2006 International Conference on Role and Reference Grammar報告

大堀研究室 古賀 裕章 (総合文化研究科・博士課程3年)

2006年9月28日から10月1日にかけて、ドイツのライプツィヒで開催された2006 International Conference on Role and Reference Grammarに参加した。この学会は、機能的アプローチからの個別言語の記述、類型論的研究に携わる研究者が世界中から参加する学会である。今回の学会においても、多くの個別言語の記述によって明らかになった現象を適切に記述、説明するために、新しい概念、道具立てが導入され、これまで使われていた概念、またはそれを指すターミノロジーを廃止、再定義するなど、理論をより洗練されたものにするための議論が、アットホームな雰囲気でも活発になされていた。

私は大堀先生と共に、日本語の動詞「くる」のヴォイスに関連する機能について、口頭発表を行った。「太郎は私に電話を{??した / してきた}」の例に見られるように、行為が話者以外の参加者から話者に対して行われた場合、「くる」の使用が義務的、または強く好まれるという事実が先行研究で指摘されている。我々の発表では先行研究の問題点を指摘した上で、「くる」が持つヴォイス的機能と受身機能の類似点、相違点、そして「くる」と「くれる」に見られるヴォイス的機能の類似点、相違点を明らかにし、このような視点現象をRRGの枠組みでどのように捉えるべきかを議論した。

この学会で多くの研究発表を聞き、多くの研究者と交流を持つことができ、とても刺激を受けた。これからもRRG理論、言語理論一般の発展に貢献できる研究ができるように、努力を続けていきたいと思う。

研究成果紹介

プロジェクトベースの報告

空間移動表現の類型論的研究

大堀氏と私が共同で担当するプロジェクト「空間移動表現の類型論的研究」では、いくつかのパラメータを用いて、複数の言語の空間移動表現の対照研究を行ってきました。今年度末に、最初の報告書『空間移動の言語表現の類型論的研究1 東アジア・東南アジアの視点から』（英文題目 Typological Studies of the Linguistic Expression of Motion Events Volume I: Perspectives from East and Southeast Asia, Edited by C. Lamarre and T. Ohori）を刊行します。日本語の論文2編、英文論文3編と中国語論文3編という構成で、対象言語は副題の通り、従来の空間移動の類型論的研究において蓄積の少ない東アジアと東南アジアの言語が中心です。日本語のほかに、中国語（共通語に加えて北京口語・山西方言・陝西方言という地域語も対象となっています）、タイ語、そして死語である西夏語のデータが分析されています。著者のプロジェクト担当の大堀とラマルの単著論文のほかに、COEに何らかの形で関わった若手研究者との共同論文、そしてCOEの活動の一環として招いた外国人の研究者による論文も含まれています。

そして第2冊目の報告書として、このプロジェクトのRAを勤める言語情報科学専攻所属の大学院生が主役となって、翻訳テキストを用いた研究の報告書『空間移動の言語表現の類型論的研究2 村上春樹の「ノルウェイの森」における自律移動表現の対照研究（日・仏・英・露・中・独）』も来年度の初めに出る予定です（News Letter No.9 日本言語学会ワークショップ報告参照）。

（C. ラマル・大堀壽夫、統合言語科学部門）

客観的なLCS辞書構築に向けて

語彙概念構造（LCS）とは、動詞の意味を意義素の組み合わせとして表現しようという体系である。動詞の様々な特徴や動詞間の関係を意義素との関係で議論しようというその方法論や、動詞の統語的特徴（統語的にどのようなふるまいをするか）と意味的特徴を関連づけていこうとする姿勢が、言語学やより深い理解を目指す自然言語処理分野に様々な示唆を与えている。我々のプロジェクトではこのLCSに基づいた日本語基本動詞の意味記述を試みている。言語資源としての有用性を求めると同時にLCS理論の網羅性を検証する目的で、ある程度の規模1,000語を最初の目標とし、なぜその語にそのLCSが付与されたかを説明できる客観的な枠組みでの構築を目指した。

具体的方法としては、言語学の背景を持つ被験者を想定したLCS付与のための設問セット（アンケート）を設計し、それを用いた調査によって辞書構築を行った。この方法で日本語基本動詞の意味記述が7割程度という精度で行えることを検証した。問題を持つ3割にも一定の傾向があり、設問の追加と改良により精度を改善できる見込みを得ている。調査で得られた結果には、これらの分析を通じて人手により適切と思われるLCSが与えられており、辞書としての適切性が補強されている。これに加えて、調査で得られたデータから、利用した設問の特徴や問題点、LCSに関する検討が充分でない動詞群の存在を明らかにできた。

これらの成果は、<http://taurus.c.u-tokyo.ac.jp/lcs/index.html> および「語彙概念構造辞書構築のための設問セットの設計とその評価（レキシコンフォーラムNo.2掲載）」にまとめられている。このプロジェクトを通じて、極めて近い関心を持つ岡山大学の竹内孔一氏や奈良先端科学技術大学院大学の乾健太郎氏との議論を深めることができ、今後の辞書構築でも協力していく予定である。2005年3月にはシンポジウム「語彙概念辞書の構築と応用」を開催し、多くの方々のご意見を頂くと同時に我々の関心をアピールすることもできた。

今後は、今回の調査で適切な扱いが難しかった動詞群のLCSについてその枠組みを補強し、アンケート調査で問題となった動詞の多義の扱いを検討しつつ、言語資源の構築とLCS理論の精緻化の両面を考慮しながら検討を進めていく。言語学的理論に裏打ちされ、質と量の両面で工学的にも有用な言語資源を構築することを通じて、言語学と情報科学の融合の一助となっていきたい。

（伊藤たかね・加藤恒昭、心理言語科学部門・計算言語科学部門）

活動報告

1 COE 研究発表会 (事業推進者等の研究発表・討論会)

- 第41回：COE研究会 進化認知科学連続セミナー2006**
 日時：2006年10月11日
 場所：13号館1313教室
 担当：長谷川寿一
 講演者：長谷川寿一「心の起源に挑む:進化認知科学からのアプローチ」
- 第42回：COE研究会 進化認知科学連続セミナー2006**
 日時：2006年10月18日
 場所：13号館1313教室
 担当：長谷川寿一
 講演者：渡辺茂(慶應義塾大学)「脳の進化:ヒト型脳とハト型脳」
- 第43回：COE研究会 進化認知科学連続セミナー2006**
 日時：2006年10月25日
 場所：13号館1313教室
 担当：長谷川寿一
 講演者：David Spragg (農業環境技術研究所)「サルの一生涯・ヒトの一生涯」
- 第44回：COE研究会 進化認知科学連続セミナー2006**
 日時：2006年11月8日
 場所：13号館1313教室
 担当：長谷川寿一
 講演者：長谷川寿一「ヒトは、どこがユニークなチンパンジーか」
- 第45回：COE研究会 進化認知科学連続セミナー2006**
 日時：2006年11月15日
 場所：13号館1313教室
 担当：長谷川寿一
 講演者：Damien Caillaud (モンペリエ大)「ゴリラ社会からヒトの原初社会を考察する」
- 第46回：COE研究会 進化認知科学連続セミナー2006**
 日時：2006年11月22日
 場所：13号館1313教室
 担当：長谷川寿一
 講演者：船曳建夫、上野有理「『食』の起源と発達—サル、乳児、幼児」
- 第47回：COE研究会 進化認知科学連続セミナー2006**
 日時：2006年11月29日
 場所：13号館1313教室
 担当：長谷川寿一
 講演者：吉川泰弘「脳とこころ:動物とヒト」
- 第48回：COE研究会 進化認知科学連続セミナー2006**
 日時：2006年12月6日
 場所：13号館1313教室
 担当：長谷川寿一
 講演者：諏訪元「初期人類化石の性差から社会・行動特性をさぐる」
- 第49回：COE研究会 進化認知科学連続セミナー2006**
 日時：2006年12月13日
 場所：13号館1313教室
 担当：長谷川寿一
 講演者：石田貴文「霊長類の社会、性、遺伝子」
- 第50回：COE研究会 進化認知科学連続セミナー2006**
 日時：2006年12月20日
 場所：13号館1313教室
 担当：長谷川寿一
 講演者：入来篤史(理化学研究所)「知性の神経生物学」
- 第51回：COE研究会 進化認知科学連続セミナー2006**
 日時：2007年1月10日
 場所：13号館1313教室
 担当：長谷川寿一
 講演者：板倉昭二(京都大学)「自己の起源—比較認知的科学的アプローチ」
- 第52回：COE研究会 進化認知科学連続セミナー2006**
 日時：2007年1月17日

場所：13号館1313教室
 担当：長谷川寿一
 講演者：丹野義彦「なぜ不応答はなくなるのか:精神病理の二面性」

第53回：COE研究会 (PDの研究発表会)

日時：2006年12月26日
 場所：3号館113号室および17号館ホール
 発表者：旦直子、濱崎裕子、大江朋子、角恵理、高橋麻理子、伊藤匡、久保寺俊朗、高橋泰城、植月美希、小林由紀、岩井智彦、大塚明香、戸次大介、上野有理

2 COEシンポジウム・セミナー(共催のものも含む)

第38回：COE共催国際ワークショップ：

Workshop on Dynamic Syntax: What can the study of head-final languages contribute to the theory?

日時：2006年10月6日
 場所：東京大学 駒場キャンパス18号館4階コラボレーションルーム

担当：伊藤たかね
 講演者とタイトル：

Kei Yoshimoto (Tohoku University) "Introduction: A Crash Course in Dynamic Syntax"

Hiroaki Nakamura (Japan Coast Guard Academy) "Topic-Comment Articulation: A Dynamic Syntax Approach to Information Packaging"

Yoshiki Mori (Tsukuba University) and Ken-ichiro Shirai (Chukyo University) "Dynamics in Context Shift"

Kei Yoshimoto (Tohoku University) "Dynamic Syntax as a Neuro-Cognitive Model of Human Parsing"

Masahiro Kobayashi (Tottori University) "Anaphoric Treatment of Floating Quantifiers in Japanese and Grammar Implementation"

Ruth Kempson (King's College London) "Grammars as Parsers: Japanese - The Challenge of Word-Order Variation"

Jieun Kiaer (King's College London) "Incrementally Parsing the Syntax of Verb-Final Languages"

第39回：COE共催学会：第6回日本認知療法学会

日時：2006年10月7日~9日
 場所：東京大学駒場キャンパス12号館・13号館
 担当：丹野義彦
 講演者とタイトル：

デイビッド・クラーク(ロンドン大学精神医学研究所)「社会不安障害(対人恐怖)の理解と治療に対する認知的アプローチ」

講演者とタイトル：
 アンケ・エーラーズ(ロンドン大学精神医学研究所)「外傷後ストレス障害(PTSD)の認知モデル:理論と治療」

第40回：COE共催シンポジウム：第6回日韓対照研究会

日時：2006年12月12日15:00~18:00
 場所：東京大学駒場キャンパス18号館4階コラボレーションルーム2

担当：生越直樹
 講演者とタイトル：

李賢熙(ソウル大学)「韓国文字論の理解:通時的観点から」

研究発表：李光輝「韓国語takoについて」

3 COE主催・共催研究会

第78回：COE共催研究会：「進化と意思決定」

日時：2006年9月30日14:00~
 場所：東京大学駒場キャンパス16号館107室
 担当：繁樹算男
 講演者とタイトル：

平石界(東京大学)「適応的な意思決定・戦略と個人差」

- 高橋泰城(東京大学)「時間選好・不確実性下の意思決定の進化神経経済学」
指定討論：繁榊算男(東京大学)「公理論的最適化と進化的最適化」
- 第79回：COE共催講演会**
日時：2006年10月3日18:00～
場所：慶応大学三田東館6階 G-SEC Lab
担当：幸田薫
講演者とタイトル：
Günther Grewendorf (University of Frankfurt am Main) “Fronting remnant categories”
- 第80回：COE共催講演会**
日時：2006年10月4日18:00～
場所：東京大学駒場キャンパス18号館4階コラボレーションルーム3
担当：幸田薫
講演者とタイトル：
Günther Grewendorf (University of Frankfurt am Main) “The biological perspective on language”
- 第81回：COE主催講演会：**
「ドイツ語の構文・認知」第2回研究発表会
日時：2006年10月5日16:00～17:50
場所：東京大学駒場キャンパス10号館3階会議室
担当：幸田薫
講演者とタイトル：
稲葉治朗(東京大学) “Cases of scrambling as feature-driven movement”
矢田部修一(東京大学) “Evidence for the linearization-based theory of long-distance scrambling in Japanese”
- 第82回：COE主催講演会**
日時：2006年10月5日18:00～
場所：東京大学駒場キャンパス10号館3階会議室
担当：幸田薫
講演者とタイトル：
Günther Grewendorf (University of Frankfurt am Main) “Complementizer inflection in Germanic languages”
- 第83回：COE共催研究会：意味論研究会**
日時：2006年10月13日16:30～
場所：東京大学駒場キャンパス18号館4階コラボレーションルーム2
担当：Christopher Tancredi
講演者とタイトル：
金沢誠(国立情報学研究所 / 総合研究大学院大学) “Parsing and Generation as Database Queries”
- 第84回：COE共催講演会：東京音韻論研究会**
日時：2006年10月15日14:00～
会場：東京大学駒場キャンパス18号館4階コラボレーションルーム3
担当：田中伸一
講演者とタイトル：
時崎久夫(札幌大学)「なぜOV言語はCVか:語順と音韻の相関性」
- 第85回：COE共催講演会**
日時：2006年10月30日18:30～20:00
場所：東京大学駒場キャンパス3号館113室
担当：長谷川寿一
講演者とタイトル：
Patricia Gowaty (ジョージア大学) “The hypothesis of compensation for lower offspring viability under constrained mate preferences”
- 第86回：COE主催講演会**
日時：2006年11月16日 16:30～18:00
場所：東京大学駒場キャンパス10号館3階会議室
担当：大堀壽夫
講演者とタイトル：
Suzanne Kemmer (Rice University) “A Cognitive Analysis of English Dimensional Terms”
- 第87回：COE共催研究会：意味論研究会**
日時：2006年11月17日16:30～
場所：東京大学駒場キャンパス18号館4階コラボレーションルーム4
担当：Christopher Tancredi
講演者とタイトル：
Philippe Schlenker (UCLA & Institut Jean-Nicod) “Be Articulate: A Pragmatic Theory of Presupposition Projection”
- 第88回：COE共催講演会：東京音韻論研究会**
日時：2006年11月26日13:00～
会場：東京大学駒場キャンパス18号館4階コラボレーションルーム3
担当：田中伸一
講演者とタイトル：
佐藤大和(東京工業大学)「古典文学における日本語音声要素の統計的性質」
坂本洋子(獨協大学大学院)「日本語における語末の短音化現象:母音長測定による分析」
- 第89回：COE共催講演会：東京音韻論研究会**
日時：2006年12月17日13:00～
会場：東京大学駒場キャンパス18号館4階コラボレーションルーム4
担当：田中伸一
講演者とタイトル：
石川圭一(京都女子大学)「英語話者と日本語話者による音節の認識: syllabificationとsyllable-counting taskによる検討」
- 第90回：COE共催国際講演会**
日時：2006年12月23日14:00～16:00
場所：東京大学駒場キャンパス18号館4階コラボレーションルーム1
担当：Christine Lamarre
講演者とタイトル：
施其生(中山大學 / 大東文化大學)「中国語の動詞連続構文の再検討 —— 汕頭方言の補文標識を手がかりに」
- 第91回：COE共催研究会：意味論研究会**
日時：2007年1月26日16:30～
場所：東京大学駒場キャンパス18号館4階コラボレーションルーム2
担当：Christopher Tancredi
講演者とタイトル：
Chris Barker (New York University) “Weak cross-over and polarity licensing: it's order of evaluation, not linear order”
- 第92回：COE共催講演会**
日時：2007年2月16日16:00～
場所：東京大学駒場キャンパス18号館4階コラボレーションルーム1
担当：広瀬友紀
講演者とタイトル：
Yowyu Lin & Susan M. Garnsey (University of Illinois at Urbana-Champaign) “Comprehension of Mandarin Headless and Headed Relative Clauses”